

平成米騒動の顛末とその対策について

岸 紅 児

昨年の6月、梅雨に始まる長雨は7月8月になっても多雨、日照時間の減少、盛夏にもかかわらず気温が上がらず冷夏で、更に日本列島を縦断する「台風」は幾つも九州・近畿・関東・東北を席卷して台風禍の傷痕をもたらした。

これらの「長雨」・「冷夏」・「台風」・更には北海道を襲った「津波」と「地震」は我国に多くの災害をもたらした。その第一は生鮮野菜の不足であった。

8月に始まったキャベツ・レタス・胡瓜等の青物野菜の不足による価格の高騰は台所を強襲し近隣の国々の緊急輸入によって急場を凌いだ。

9月に入って早場米の収穫が始まる頃から「米の実入りが少ない」ことが新聞紙上に取り上げられ、今年の米作は平年より悪いという評判が立ちはじめた。

11月の始め、農水省は今年の災害による被害の総額が1兆2千2百億円に登ると発表した。

- その内訳は、A. 低温日照不足（7月～9月）……………1兆70億円
（内81% 8,156億円＝米作被害）
- B. 長雨豪雨 5月～8月中旬）……………1559億円
（内56% 877億円＝米作被害）
- C. 台風列島縦断（ 9月 ）…………… 493億円
（内57% 280億円＝米作被害）

これらの被害は北海道・東北・関東・近畿・中国・九州 等全国29都道府県に及びその中でも米作不良は北海道・東北の3県に著しい被害がもたらされた。

米の作柄を表す『作況指数』という言葉が新聞やテレビで紹介され始めた。

作況指数と言うのは平年米作を100として米の出来具合を指数で表すものである。

9月に新聞やテレビでは作況指数は『80』と発表されたが10月の後半になって米の出来具合はもっと悪くて、特に北海道や東北は作況指数30(青森=28岩手=33宮城=32)と最悪で土地によっては青刈りと呼ばれる収穫の見込まれない稲を黄色くなる前に刈り取ってしまうことも行われたそうである。

事態の深刻さは10月の末になって農水省は全国平均作況指数を『75』と発表し、近年希な不作「米作百年目の作柄不良」と訴え、不足分を輸入して不足分をカバーしたいと食糧庁に働きかけた。

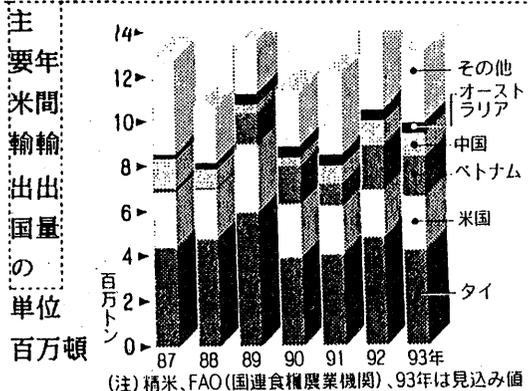
今年の産米は約750万トンと予測され、過去の最高1300万トン(1975、1977年)今までの最低930万トン(1980、1991年)と比べても近年希に見る不作である。現在我国の米消費量は少しずつ減少傾向をたどり、1975年=1200万トンから1980年=1100万トン、1990年=1050万トン、1992年=1000万トン程度とパンや麺類の混食の普及につれて減っているものの、1億2千万人の胃袋に年間1千万トンの米が消費されている現実である。

この数字から今年から来年にかけて250万トンの不足する米を輸入しなければ米の買い占めや価格の高騰により『米騒動』

が起こりかねないので緊急輸入の措置をとることが承認され商社を通じてタイ・米国・オーストラリアの国々と交渉が始まった。

我が国は国内米作農家の保護のため外国よりの米の輸入は禁止乃至条件付きの部分輸入しか認めていなかった。

条件付きとは加工米(ピラフ・おかき・せんべい等)として年間僅かに5～6万トンの外米が輸入されていたに過ぎない。

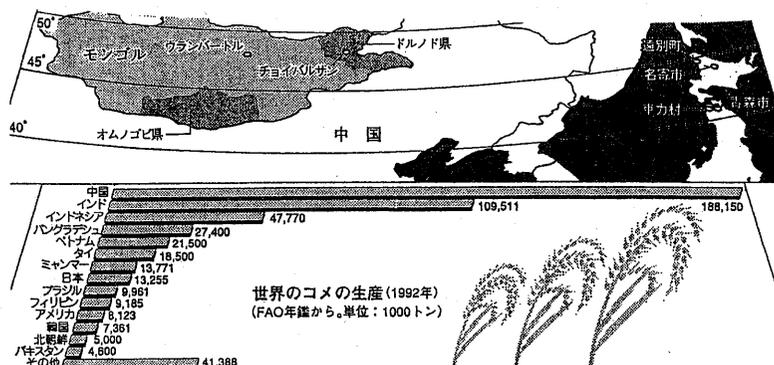


この外、我が国の米の消費は主食以外に『日本酒』の醸造に年間5～60万トンが消費されている。酒造米と呼ばれる原料米は日本酒造組合所属の全国2400軒の酒造メーカーに供給される。

これらの主食用米・酒造用米・米菓加工米として必要な250万トンを輸入する必要に迫られた日本に対して世界の米供給量は年間1000～1300万トンである(前頁グラフ参照)

*参考 世界の米生産高(1992年 FOA年鑑より)

(数字の単位:1,000噸)



米の輸出国は タイ・米国・ベトナム・中国・オーストラリア・その他、米の輸入国は イラン・マレーシア・印度 等比較的後進国乃至経済的に余裕の無い国に偏っている。

米は小麦や玉蜀黍等と異なり地球全体で見ると貿易額では少ない方に属している。しかし従来、米の輸入を禁止乃至は制限を行っていた我国が突然輸入をすることは世界の国々に2つの波紋を投げかけた。

その1は『ガット』……関税貿易一般協定と『ウルグアイラウンド』……『多角的貿易交渉』に加盟する米国・西欧諸国である。これらの国々は日本の貿易黒字の解消のため、「米」を先頭に「柑橘類・牛肉・乳製品」の農畜産物の全面自由化を迫っており、いままで国内の米作・畜産農家保護政策の建前から輸入制限や禁止をしていた日本の態度は今回の緊急輸入を契機として180度の方向転換であり、ガット加盟国は今回の輸入を恒久永続的な輸入と見なし

て貿易黒字の緩和ないしは解消という面では諸外国より歓迎の態度で評価されている。

その2は米の価格問題である。もともと政府が米の輸入禁止乃至は制限をした最大の理由は日本の米価の高い事に由来する。1993年の国別米価(加工米生産者価格)を比較すると

	日本	米国	タイ
米1トンの\$価格	1556\$	236\$	163\$
米10疋1袋価格	1680円	254円	176円
米国対比倍率	6.6倍	1	
タイ対比倍率	9.5倍		1

参考 10月末食料庁推奨の主食用米10疋1袋価格は4400～4800円
自主流通米混入率により府県別価格差あり

前記は比較的価格の安い加工米の比較、主食用の米価は上の参考のようにもっと高く自主流通米のトップブランドである「ささにしき」「秋田小町」等は五千円から六千円の価格が今年(6年2～5月)は一万円/10疋袋で販売された。市場流通価格を比較すると日本の米価格は米国の2.6倍、タイの6.6倍から十倍以上となっている。

従って、輸入米を外国から買付けて輸送費や検疫費用(農薬検査等)保管流通費用をかけても日本国内で販売すると莫大な売買差益が発生する。即ち日本政府の買付ける百八拾万噸の米を「政府米準抛」として食料庁の流通経路で販売するとその差益は三千九百億円に達して「食料管理特別会計」として大蔵省の金庫に入る。

このように世界一 米価格の高い日本が世界年間貿易量の四分の一(250万トン/1千万トン) 近くのを輸入しようとするると世界的な米価上昇を招くことになる。

また米の貿易専門家の意見として、俗に『ジャポニカ米』と呼ばれる我国の主食用米(短粒米)は米国の他オーストラリア・タイの一部でしか入手できず、輸入可能量は100～120万トンが限度であるという意見もある。従って残りの100万トンは米菓加工米(長粒米)として輸入して主食以外の利用を考えないと供給量を満たせないことになる。

また、別な意見は食料庁では国産の短粒米に輸入の長粒米を10～20%混入(ブレンド)して米穀市場へ流し主食用に流用して流通面の障害を少なくしたいという意見もある。

しかし、流通業者筋では『国産銘柄米と輸入米をブレンドして標準価格米として販売すると一般消費者の反発を受けるので、米の用途=米菓(餅・おかき・あられ・せんべい類)酒造用・醸造用(味噌・醤油)米調整品(米缶詰・ピラフ・ビーフン等)和洋外食産業向と、用途別に区分すること、主食用にしても銘柄と用途(鮭米等)や価格のランクを付けて「自由米」とし消費者に選択させるべきだ』と主張している。

ブレンド(混米)を押しつけようとする政府の方針に対する不満と不信に他ならない。

次に200万トンの米をどのようにして運ぶか? 物資の流通問題がクローズアップする。

現在世界の穀物輸送は大半が「袋」によって行われている。小麦粉等の粉体輸送には圧搾空気によるパイプ吸引があるが粒体で比重の重い「米」は圧縮空気吸引は不可能、袋運搬は機械化が難しい。

最近の大量運搬は「コンテナ」輸送が大半であるがコンテナへの積み込みはフォークリフトを使用しフォークリフトへはパレット、パレットへ袋を載せるには人手が便利である。

穀物運搬用の袋は綿麻混紡のドンゴロス袋やクラフト紙袋またはビニール袋、等があげられる。

通常これら穀物は人の手で運ぶ建前から一袋当たり3～50匁となる。従って1トンの米を50キロの袋に入れると20枚の袋が必要となり、100トンで2,000枚の袋、百万トンで2,000万枚の袋が必要となる。

因に緊急輸入される「タイ国」産の輸入第一次船は昨年11月18日横浜港に入港し加工用の長粒米計七千噸(50匁/袋計14万袋)を数拾袋単位でクレーンで釣り上げて荷揚げをすると1週間位かかるそうで、横浜に続いて19日神戸港・第二次船、22日博多港・第三次船、引き続き名古屋港と各地に輸入米船が相次いで入港し博多港ではタイ産の「うるち米」六千五百噸「餅米」二千五百噸が加工用米として入荷し10日ほどかかって荷揚げするとテレビや新聞で報道された。

12月にはいとカルフォルニア米を積んだ米国船が次々と入港し、タイ・

北米・中国等より加工用米 20 万噸・今年の 2 月以降、北米産の主食用米 90 万噸が日本に陸揚された。

雑穀を積む船は貨物船として荷役設備が旧式であり米袋を手作業とクレーンによる釣り上げではでは 1 万噸の荷揚げ作業に 10 日位必要となる。

荷揚げされた米を検疫検査・袋詰め作業（輸入時 50 匁の麻袋を 10 匁のビニール製国内用流通袋詰）送り先別仕分け・トラック積み込み作業 等を行う大型倉庫・各地の米卸問屋への配送トラック等の荷役配送の機械設備も 200～250 万噸を取り扱うためには

* 船舶＝一隻当たり 1 万噸積み貨物船 200 隻 1 万噸の荷役に 10 日かかるとして東京・横浜・名古屋・大阪・神戸・博多の主要港に毎月 3～4 隻の配船が必要となる。

* 貨物自動車＝市内配達用の 4 噸トラックで 200 万噸を運ぶと 50 万台のトラックが必要となり 1 日当たり二千五百台の車が必要となる。

主食としての『米』を輸入して国民の食卓に載せるまで多くの費用と手数が掛かることがこの数字で理解できる。米の不作のもたらした経済効果は我が国にいろんな問題点を示唆している。

1. 農業政策の貧困さ＝減反による収穫量の減少、休耕田の稲作復帰にかかる時間の問題。
科学肥料や機械耕作による水稻の耐侯性の弱さ、即ち天災への耐久力。
2. 貿易黒字と貿易問題＝米輸入代金と輸送流通手段があったため饑餓や飢饉から逃れる事ができた。
50 年前に今回の不作が起これば『米騒動』や暴動が起きたであらう。
経済大国として半導体や電子機器(テレビ・ビデオ)自動車等の輸出により得た貿易黒字のお陰で米の輸入は海外の国々の協力で可能となりつつある。
一方、今までの農業保護政策から米・柑橘・乳製品等の輸入禁止乃至制限はこれを緩和乃至廃止しなければ海外の国々の理解を得られない国際関係の変化をもたらした。

3. 米の流通価格高騰＝米不足は消費者価格を値上げするきっかけを作った。

11月に入っ米屋や米穀スーパーの店頭価格が相次いで上がった。更に新米の出回りが遅れて品不足感を抱かせた。

このため、米の大量消費先である病院患者の給食・学校給食等の飯米の値上げや米の代替（うどん・パン）切替等が行われた。

一般消費者を対象とする流通米も最近はいち買い占め防止のため従来の10匁袋より5匁袋にパッケージが小さくなり一人2袋までの販売と規制している状態となった。

価格も「ささにしき」・「秋田小町」等の銘柄米は1袋5～6,000円からさらに値上がりし今年の2～5月には首都圏で最高一万二千元/10匁袋の高値となった。

加工米を使う「焼きお握り」や「ピラフ缶詰」・「おかゆ缶詰」等のレトルト食品も新年（平成5年1月）より1割程度の値上げとなった。

4. 輸入米に対する日本農家の対応

昨年12月にはタイ産のインデカ米が市場に出てきた、当面は加工米として味噌や醤油の醸造用として販売されたが醸造業者は米質が日本米と異なり、2度蒸しや水加減を試験しないとそのままでは使用できず、工程変更や加工設備の更新を必要とした。

1月に入るといよいよ主食用の北米産ジャポニカ米（短粒米）が市場に出回ると事態は急変した。市場は価格と品質、特に飯米として日本人の嗜好にマッチするか否かで国産米と輸入米の対立となった。

農協を初めとして米作農家は社会党・自民党を「米輸入反対の旗印」としてきたが、細川内閣の連立与党がウルグァイラウンドの受け入れをきめ、4%～8%の段階的輸入を容認する決定を下したことは日

本の農政や米造りに大きなインパクトを与え減反政策に協力してきた農家や農協に対して失望と反感をもたらした。農政の失敗を政府に糾弾する雰囲気となった。

5. 日本の米市場に対する米輸出国の期待

- * タイ……………タイは世界の米貿易の三分の一を握っている、日本も輸入量の三分の一はタイより輸入すべきである（タイ・アムヌアイ副首相談）
- * 豪州……………日本には年間30万トン輸出したい、様々な条件によって豪州が不利にならないように留意して欲しい。（オーストラリア米生産者組合ジム・ケネディ理事長）日本で刈り取りの済んで6ヶ月たった時期に新米を供給できるのは豪州だけ。豪州米生産者組合ダビッジ会長）
- * 中国……………中国の東北地方の米は日本に向く短粒米であり、日本国民の嗜好に合うと思う。沢山輸入して欲しい（中国・李鵬首相）
- * ベトナム……………現在マレーシャ向輸出に日本向として南部メコンデルタ地帯でのジャポニカ米の試験栽培を開始。
- * アメリカ……………日米二国間交渉の立て役者「米国」は日本の輸入量の二分の一はアメリカより輸入を非公式に要求している。

結局、日本の米輸入問題はアメリカとアジア諸国間の経済戦争に関係をもたらした。

これらの意見は朝日新聞竹岡記者（93年12月20日記事）の報告である。

93年度の世界最大の米輸入国はイラン（年間90万トン）であり日本が40乃至80万トンの輸入を始めれば2～6位の輸入国となる。2001年以降は更に輸入量が増加し、ミニマムアクセスをやめて関税化すると輸入量は2～300万トンにも及ぶ可能性も出てくるそうである。

米輸出国のタイ国最大の輸出会社「スーン・ファ・セン」は日本と気象条件の似た中国・雲南省に年産能力、百万トンの精米工場を建設し、タイの

国立農業試験場(パトゥンタニ県)は各種日本米をタイの栽培条件に合った品種改良に着手しており「作付けを輸入国の嗜好に合った品種に切り換える」・・アムヌアイ副首相の意見を実行しはじめた。この外、中国・李鵬首相が力を入れている、東北地方の短粒米(ジャポニカ米)の増産が行われ、百万トンの在庫がありこの内数十万トンが米緊急輸入の対象として商社が買い付け中とのニュースが流れた。

6. 輸入米上陸後の日本市場の期待と不安

NHKのサンデー経済スコープでは加工米業者の声として次のようにテレビ放映した。

加工米の用途＝味噌・醤油・餅・せんべい・あられ・缶詰(おかゆ・加工飯)等、年間140万トンが必要とされ、今年度の最初の輸入米としてタイ産20万トンが食料庁の手で加工米業者に配られた結果次のような問題点が指摘された。

- *.タイ産米は精米処理が不十分でごみや異物が多い(小石・砂・金属破片・繊維滓等)国産米の10倍混入されているので再度精米処理するため精米機や色彩選別機(米のカラー濃度の区分)の機械費用と手数がかかる。(事実、輸入した当初は検査で手数と費用でかなり手間取った)
- *.米加工業者(味噌)の場合 タイ米は吸水性が悪く、水分の不足を補うため蒸作業を2回行うので国産米の二倍の作業時間がかかる。また作業の効率のため蒸機械をタイ米用に新設した。
- *.加工米に関してはコストが国産米より高くなる。理由は流通の費用が国産米より余分にかかるため。

	米1トンの輸入原価	荷役費用	精米費用	合計
輸入米噸当費用	142,270	+ 1,200	+ 15,950	= 159,420円
国産米噸当費用				155,800円

輸入米の国内販売価格は食料庁が 輸入量・相手国・配分先・原地価格に管理費用を加算して差益を食管差益として計上して算定される。この価格に前述の設備や作業の費用が加算されるため。

7. タイ米の業界団体の評価

加工方法を工夫することにより

◎利用可 ピラフ・カレー焼き飯等加工食・粥缶詰

△何とか使える 味噌・醤油・冷凍食品

×全く使えない 餅・せんべい・あられ・日本酒（粘りけ・伸びがない・匂い・香ばしき欠ける）

8. 主食用の輸入米国内販売開始の顛末について

2/4日、NHK朝のニュースにて2/10より輸入米が国内販売されることを報道した。

それによると

中国 3	アメリカ 3	オーストラリア 1	タイ米 3	国産米
70%				30%

の比率で販売すると公表した。

また食料庁は2/6の全国主要日刊新聞にて主食米の国内販売を告示した。

内容は1. 安定供給のための輸入であること。

2. 輸入米は3段階の検査で食品衛生法に基づく厳重なチェックをおこなう。

3. 食糧管理制度に基づく公平な供給である。

4. 販売価格の表示方法の基準を示す。特に混入率・原産地・精米業者名・精米日付等を明記して消費者の不安を解消しブレンド米として正規販売の印象づけ。

であった。しかし、消費者はブレンド米を敬遠し、飯米としては高くても国産米を買いタイ米等の輸入米は食料庁の必死のPR(ブレンド米の美味しい炊き方等……テレビ新聞)にも拘らず、カレーやピラフに輸入米を使用するにとどまった。

その結果、市場には輸入米(特にタイ米)が売れず、在庫として業者の倉庫に溢れている。

また、タイ米を仕入れた業者は在庫が捌けず、やむなく国産米に付録として付けたり、無料で売ったりして在庫を減らそうと努力した。

以上のような米問題に就いてさまざまな政策や処置が取られて昨年の夏より丁度1か年を経過した。

昨年の多雨・冷夏に対して今年は雨なしと猛暑の夏である。冷害に泣いて種籾がなく沖縄に依頼した種籾は岩手で6月に田植えされてすくすくと稲は育っ

て早場米として市場に提供された。

また、早場米の出荷は例年の数倍の量と値段で7月の半ばより『新米』として市場に供給され始めた。

日本全国の稲作は豊作を予見して（但し雨無しの状態の一部の地域で干害の被害があった）今年度の作況指数は『107』と9月28日のNHKのテレビニュースで放映された。これは昭和56年に匹敵する豊作である。

これらの結果と現状から食料庁は当初予定した250万噸の輸入を180万トンに抑えたが消費者は外国産米より高くても国産米を購入した結果大量の在庫として外国産米が残った。

先日、『日本人一人当の米消費量が20年前の「110匁／人年」から最近は「70匁／人年」に減少した』というNHKのニュースから推察すると食料庁は米消費量の算定を過去のデータで年間必要量を計算し250万噸の輸入を決意したのだろうか？

いづれにしても法律（食料管理法）や制度（減反）政策の変更によって国内と海外に対する姿勢を変更して日本農家や輸入業者と海外諸国の政府や米生産者に対応しなければならないであろう。

天候に左右される日本の『米問題』は例え今年が豊作であっても今後の国内・海外共にいろいろな問題点を抱えて我国の経済と政治に改革と影響をもたらすであろう。

以上、